

「悪」をめぐるふたつのルポ ——アーレントと村上春樹が向き合ったもの——

三 浦 隆 宏*

Two Reports on Evil : Hannah Arendt and Haruki Murakami

Takahiro MIURA

ハンナ・アーレントと村上春樹。片や20世紀初頭の1906年にドイツ系ユダヤ人として生を受け、1975年に米国のニューヨークで亡くなった、女性の政治思想家。片や二度目の世界大戦の終結からまだ間もない1949年に京都で生まれ、いまや世界中に数多くの読者をもつ日本人作家。この二人に接点を見いだそうとするならば、その筆頭は、雑誌「ニューヨーカー」と有名な裁判の傍聴経験になるだろうか。

アーレントは、1960年に潜伏先のブエノスアイレスで拿捕され、翌年エルサレムで裁かれた、元ナチ親衛隊中佐アドルフ・アイヒマンの裁判を傍聴し、その報告を1963年の2月と3月に延べ5回にわたり「ニューヨーカー」に掲載しているが、それから四半世紀のちの1990年の夏に、村上の短編小説「TVピープル」が同誌に初めて掲載される。「翻訳されたものに限っていえば、僕が最初の「ニューヨーカー」に載った日本人作家」ということになる」とは、後年の村上による回想である¹。つまり、彼の作品がこれほど世界的に読まれるようになった、その重要なきっかけをつくったのが、雑誌「ニューヨーカー」だったのである。²

そして、村上は1995年に起きた地下鉄サリン事件の裁判、とりわけ最多の死者数を出すにいたった、地下鉄日比谷線、北千住発中目黒行き電車内でのサリンガス散布の実行犯・林泰男の裁判を傍聴しつづけた。のちに村上は、『村上春樹全作品1990～2000 ⑥ アンダーグラウンド』によせた「解題」で、裁判の傍聴によって受けた林の印象等について書き綴った一節を、こう結んでいる。

しかし彼の裁判を傍聴しながら、上官に命令されて行った違法行為について異国の地で裁かれ、死刑台に上らなくてはならなかった第二次大戦後のBC級戦犯裁判のことを連想しないわけにはいかなかった。そこにある哀しみややりきれなさは、ほとんど同じ質のものなのだ。³

もちろん、この一節だけでは、村上が念頭に置いている裁判が何なのかは、定かにはならない。とはいえ、その数年後に行なわれたあるインタビューでの、彼の以下の発言を重ね合わせてみるとどうだろうか。

麻原がそのシステムを何から学んだかといえば、国家権力から学んでいます。ナチは徹底

*心理学部 准教授

的な思想教育をすることによって、サーキットを閉鎖系にし、ユダヤ人の虐殺を上から指令として押しつけた。たぶんアイヒマンという人間自体は悪でも善でもないんでしょう。ただ非常に有能な官僚で、上から与えられた課題を実に効率よく、手際よく処理解決していった。彼には、命令の内容が善であるか悪であるかということを判断する基準もないし、つもりもありません。だから戦後逮捕されてイスラエルで死刑判決を受けたときにも、その意味がまったく理解できていない。記録映画を何本か見たけれど、どうして自分が死刑になるのか、本人はまるで理解できていない。

そういう思考の閉鎖性というのは、考えてみたら本当に怖いことです。⁴

林の裁判を傍聴しつづけるなか、村上が「連想しないわけにはいかなかった」人物、アイヒマン。その彼の裁判をエルサレムで傍聴したアーレント。二人の作家がその人生においてたまたま遭遇したふたつの裁判は、アーレントと村上春樹にとってどういう意味をもっていたのだろうか。そして、二人が裁判の傍聴によって見いだした「悪」には、なにか共通するものがあるのだろうか。本稿では、これらふたつの問いについて考えてゆく。⁵

1 『エルサレムのアイヒマン』が採用した語り口

アーレントが生涯に書き残した諸作品の総体を見わたすと、その多様な表現の形式、そしてジャンルの幅広さに、私たちは驚かされることになる。複数性という人間の条件を重視しつづけた思想家は、自身の著作においてもそれを体現していた。

たとえば、1951年刊行の『全体主義の起源』。全体主義を、「西欧近代が潜在的に抱えてきた矛盾の現われとして理解することを試みる著作である」⁶が、これは、「思想・哲学書であると同時に、歴史的研究の書でもある」⁷といわれるし、『ラーエル・ファルンハーゲン』（1959年）は、その名のとおりの一人の女性の伝記である。また、『過去と未来のあいだ』（1961年）は論文・論説集であり、『共和国の危機』（1972年）はより時代に即した政治評論・インタビュー集、そして『暗い時代の人びと』（1968年）は人物評伝集といった趣をもつ。むろん、これらの作品の前後には、『人間の条件』（1958年）や『革命について』（1963年）といった政治理論の書があり、彼女の最初と最後の著作は、「アウグスティヌスにおける愛の概念」（1928年）と題する博士論文と『精神の生活』（1978年）という表題の「思考」と「意志」にかんする哲学書であった。

『エルサレムのアイヒマン』は、冒頭でもふれたように、1963年に「ニューヨーカー」誌で連載されたあと、同年に一書として出版された。裁判の傍聴記という体裁を取りつつも、イスラエル政府と法廷に対する批判的な意見や、東欧・中欧でのユダヤ人の移送にユダヤ人評議会が関与していたことへの言及、そして、アイヒマンを悪の権化としてではなく、「凡庸（陳腐）な banal」存在として描いた点などが、多くの激しい非難を巻き起こした、と評される⁸。

本稿でいくつかその（アーレントと村上春樹双方の）論を参照することになる加藤典洋は、「語り口の問題」と題するアーレント論において、以下のように指摘している。

アーレントは、なぜ『ニューヨーカー』特派のルポルタージュという形でその計画を発想したか。それは当初から『ニューヨーカー』でなければならなかった。彼女のルポルタージュの発表場所は、はじめからいかにホロコーストから遠い、場違いな——そしてフリッパ

ントで不謹慎な——しゃれた都会的雑誌でなければならなかった。あの心ある多くのユダヤ系知識人を困惑させ、憤激させた「嘲弄的で、悪意ある」語り口の採用は、けっして作業の最後に現れる偶然的所与ではなくて、この仕事の起点に位置する企画の動機なのである。⁹

この引用に先立つ箇所では、加藤は、「アーレントはここでなぜこういう語り口を採用しているのか」と問うたあと、「はっきりしているのは、この語り口がたとえば作者の無思慮の結果などではありえないことである」と断言している¹⁰。つまり、友人のゲルショーム・ショーレムが彼女に問わずにはいられなかった「「軽薄さ」flippancy という英語によってまさに表現しようとする」¹¹語り口——「皮肉と風刺をまじえる乾いた語調と言い方」¹²——は、彼女の意図通りだというのである¹³。その理由は、加藤の考えでは、「共同的ではない tone（語り口・語調・文体）だけが、共同性を殺す」¹⁴ことができるからにはかならない。要するに加藤の読みからすると、アーレントが「公共性という古典古代の概念を、自分に必要としている」のも、「いわばユダヤ民族の民族性、その思想の共同性を殺すため」なのである¹⁵。

その結果、アーレントがいかほどの代償を払うことになったのかは、よく知られていよう。「発表直後から主に欧米のユダヤ人社会、またイスラエル、ドイツ国内を中心に、大きな論議を呼び、それからの数年、欧米を席卷して反・アーレントキャンペーンともいえるべき、一連のアーレント個人への非難と、激しい論争」¹⁶が巻き起こったのである。映画「ハンナ・アーレント」が、アイヒマン裁判と『エルサレムのアイヒマン』を主軸に据えたものであったことが如実に示すように、彼女の人生にとって、アイヒマン裁判の傍聴とそのルポルタージュの発表は、まさに転機とも言える出来事なのであった。

2 『アンダーグラウンド』の手法としての聞き書き

表現形式の多種多様さという点では村上春樹も負けてはいない。

1979年に『風の歌を聴け』でデビューして以降、現在までに村上は14冊の長篇小説と10冊の短篇集を刊行しているが、それ以外にも『村上朝日堂』（1984年）や『村上朝日堂の逆襲』（1986年）、『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』（1997年）といった一連のエッセイ集や『遠い太鼓』（1990年）に『辺境・近境』（1998年）、『ラオスにいったい何があるというんですか？』

紀行文集』（2015年）などの旅行記・紀行文集、および『意味がなければスイングはない』（2005年）と題する音楽論、あるいは『職業としての小説家』（2015年）という小説（家）論もある。そして、翻訳家としても紹介されるように膨大な数のアメリカ文学の訳書がある。

『アンダーグラウンド』は1997年に刊行された。およそ40年に及ぶ村上の作家生活において、ほぼ中間に位置するこの本が、その後の村上の小説に与えた影響はことのほか大きいと言える。

たとえば清水良典は、2006年刊行の『村上春樹はくせになる』（朝日新書、増補版である朝日文庫は2015年刊）で村上の作品を解説してゆくさいに、最初の著作として『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』を取り上げていた。その理由は、「よく読むと一作ごとに必ず文体や方法が変化していることがわかる」¹⁷この小説家において、「これまでの作家生活で最も大きな変化を示したのが、他でもない九五年に起こった地下鉄サリン事件の被害者たちに取材したルポルタージュ『アンダーグラウンド』である」¹⁸からにはかならない。清水は、この書物が村上春樹という作家にとってもつ意味を、つぎのように説いている。

一九九五年の二つの大きな出来事〔阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件〕は、村上春樹に大きな転換を決断させる契機となった。マラソンの折り返し点といっても大げさではないだろう。とりわけ、『アンダーグラウンド』のインタビューは、あくまで副産物としてではあるが、まさに多くの市民の生きた言葉に接する機会を彼にもたらした。耳にただけではない。テープから起こされた聞き書き文を、自分の文章へアレンジし吸収していくプロセスを、それは含んでいる。その「副産物」が、自分を作家として甦らせてくれる経験であることを、彼は確信していたにちがいない。彼がどんなに貪欲に、「ふつうの人々」の生きた声を吸収したかが『アンダーグラウンド』には記録されている。¹⁹

『アンダーグラウンド』は、地下鉄サリン事件の被害者とその遺族ら計61人のインタビュー集——村上じしんの言葉でいうと「ナラティブ(物語)の誠実な採集」²⁰——という体裁をとっている。その意図について、「はじめに」で、彼はこう書いている。「[「被害者」一人ひとりの顔だちの細部を少しでも明確にありありと浮かびあがらせたかったからだ。そこにいる生身の人間を「顔のない多くの被害者の一人(ワン・オブ・ゼム)」で終わらせたくなかったからだ」²¹。

後年に記された「解題」で、村上は「僕が小説を書くことに行き詰まって、それを打開するために、この地下鉄サリン事件を「利用」して本を書いた、という批判を受けたこともある」²²とふり返っているけれど、そのような目的がなかったにせよ、結果的に『アンダーグラウンド』は、それ以前の1980年代半ばからのおよそ10年間を、ギリシャやローマ、プリンストンにケンブリッジといった海外の都市を転々としながら暮らしてきた日本人作家が、「自分と〔地下鉄サリン事件の被害者や加害者である〕彼らは「同類」の存在なのだという新しい人間理解の場所に抜け出ていく」²³ 重大な契機となるものであった。たとえば、あるアメリカの雑誌から依頼され、「外国人の読者が地下鉄サリン事件の実相をより正確に理解できるように、時間をかけて念入りに書いた」ものの「結局採用されなかった」原稿において、村上はこう書いている。

地下鉄の駅でサリンガスを吸い込んで呼吸困難に陥り、わけのわからぬままに、激しい苦痛のうちに喉をかきむしって死んでいったのは、システムの中でこつこつと日々まじめに働いているごく「普通の人々」だった。僕は本を書くためにこの事件の被害者六十人以上にインタビューしたが、その半数以上の人々が大学教育を受けていないことを知って、少なからぬ驚きを覚えた。実行犯たちに匹敵するような高い学歴を持ち合わせている人は、ごくわずかしかなかった。²⁴

インタビューを通じて村上が会うことになった「ごく「普通の人々」」については、清水も「今現在を生きている日本人の、それも特別でないふつうの、さまざまな世代と職業の市井の人々一人一人」²⁵と、より微細な表現を与えているが、その後の村上作品を知っている私たちとしては、たとえば連作短篇集『神の子どもたちはみな踊る』(2000年)のなかの短篇「かえるくん、東京を救う」において、「かえるくん」に相棒と見込まれる東京安全信用金庫新宿支店融資管理課の係長補佐・片桐や長篇『海辺のカフカ』(2002年)で偶数章の主人公ナカタさんを四国へと運ぶ役割を担うトラック運転手・星野、あるいは『1Q84』のBOOK3(2010年)で身重の身となった女性主人公・青豆に代わって活躍することになる探偵の牛河といった登場人物らを思い浮かべずにはいられないだろう。加藤典洋は、「彼らはすべてこの『アンダーグラウンド』を契機に、村上の小説世界のなかに参加することになった、それまでけっして村上の小説で主

要な役割をふられることのなかった新顔たちである」としたうえで、「その発端、そしてそれを可能にした企てこそ、この聞き書きであり、日本のサラリーマンたちとの出会いなのである」と指摘している。²⁶

3 「悪の凡庸さ」ということば

『エルサレムのアイヒマン』が受けた非難の内実にもう少し踏み込んでみよう。たとえばゲルショム・ショーレムは、同書刊行の一か月後にアーレントにこう書き送っている。

あなたの本を読んだ後も、「悪の凡庸さ」に関するあなたのテーゼには納得がいきませんでした。このテーゼは、あなたの本のサブ・タイトルがよく考えられたものと信じるなら、あなたの議論全体を明確にするテーゼであるはずです。この新しいテーゼは、わたしにはキャッチフレーズのような印象を残します。つまり、それは、あなたが全体主義についての本のなかでそれとはまったく異なる、むしろそれとは矛盾するテーゼを使って、あれほど説得的にわたしたちに提示した深遠な分析の産物とは感じられないのです。見たところ、当時あなたはまだ、悪が凡庸であるということを発見していなかったわけですね。あなたの分析があれほど雄弁で博識な証拠を突きつけていたあの「根源悪」という問題からは、このスローガンしか残らなかったのですか。もし、それがスローガンに留まらないものであるならば、深刻なレベルにおいて、道徳哲学あるいは政治的倫理学におけるもっと内実のある概念として探求する必要があるのではないのでしょうか。²⁷

「悪の凡庸さ」という語を「キャッチフレーズ」や「スローガン」だと難ずるショーレムの言葉は、ヤング＝ブルーエルが2006年刊行の『なぜアーレントが重要なのか』の冒頭で指摘する合衆国の状況——「「悪の凡庸さ」という言葉は、衝撃的で理解しがたい大規模な犯罪が起こるたびに、朝刊に登場したり、テレビで評論家の口からとび出してきたりする」²⁸——からしても、正鵠を射たものであったと言えよう。アーレントについての大部の伝記をものした彼女から見ても、アーレントは「the banality of evil」というたった四つの単語によって、ニュースピーク〔世論操作のために用いる言葉。ジョージ・オーウェルが『一九八四年』で用いた造語〕のなかで生き長らえている」²⁹ように映るのだ。

ショーレムは、『全体主義の起源』でアーレントが提示した「根源悪」と『エルサレムのアイヒマン』で彼女が副題にもちいた「悪の凡庸さ」の矛盾を指摘していた。彼女が「悪」を「根源的な」ものから「凡庸な」ものへと捉えなおすきっかけとなったものとして指摘されるのは、旧師ヤスパースからの忠告であるが³⁰、鼻風邪までひいた「幽霊さながら」³¹のアイヒマンを実際に見るに及んで、十数年前に恩師が書いていた「思うにわれわれは、ことは実際にそうであったのだから、ことをその完全な陳腐さにおいて、そのまったく味気ない無価値さにおいてとらえなくてはいけない」³²という一文を、愛弟子は思い起こしたのかもしれない。ショーレムへの返信から約2か月後に米国のあるジャーナリストから送られてきた書面上での質問に、彼女はこう答えている。

悪は根源的（radical）なものではなく、根（radix）に行きつこうとするものではない。それには深みがなく、だからこそ悪について考えることはおそろしくむずかしい。なぜなら、

考えることは、定義からして、根に到達したいと思うことなのだから。これがわたしのいいなかったことです。悪は表層の現象であり、根源的ではなくて、ただ過激なのです。わたしたちは悪に抵抗するために、ものごとの表面に心を奪われないで、立ちどまり、考えはじめます——すなわち、日常生活の地平とはべつの次元に到達します。言葉をかえていうと、ひとは表面的であればあるほど、悪をうみだしやすいのです。そのような表層性の兆候は決まり文句の使用に見られますが、アイヒマンは、いやもうその完璧な実例でした。³³

引用の前半部について、のちにアーレントは、1965年の講義「道徳哲学の諸問題」（ショールームからの道徳哲学的に探究する必要があるのではないかという問いかけに素直に応じたものとみることでもできる）において、「最大の悪は根源的なものではありません。それには〈根〉がないのです。根がないために制限されることがなく、考えのないままに極端に進み、世界全体を押し流すのです」³⁴とくり返すことになる。また、アイヒマンの「決まり文句の使用」については、『エルサレムのアイヒマン』の本文の最後にて、本来弔辞において用いられる「紋切り型の文句」を紋首台の下で思い出し、それをそのまま述べた「彼の最後の言葉の奇怪なまでの馬鹿馬鹿しさ」について述べるとともに、「恐るべき、言葉に言いあらわすことも考えてみることもできない悪の陳腐さという教訓を要約しているのかのようだった」と結んでいたのであった³⁵。

4 「動き回る善と悪」あるいは「均衡そのものが善」

『アンダーグラウンド』の刊行から12年後の2009年に、村上春樹は長篇小説『1Q84』を発表する。「BOOK1、BOOK2を書き終えて、そのときは本当にこれでおしまいのつもり」だったというが、「出版の前にはもう〔3を〕書きたい気持ちになっていた」とのことだ³⁶。BOOK3は翌年に刊行された。本稿の冒頭ですでにいちど引いた村上のロングインタビューは、BOOK3の刊行後に旧知の編集者を相手に、2泊3日にわたって行なわれたものである。

インタビューにおいて村上は、「オウムと地下鉄サリン事件関係の事件、裁判について、僕の中にたまってきたものを、何かしら別のかたちに取り込んだかった」³⁷と述べている。それが「モチーフ」となり、「『1Q84』の場合でいえば、ストラクチャー（構造）そのものに、そのモチーフが持ち込まれ、組み込まれているんじゃないか。そんな気がします」³⁸、と。

つまりこの小説は、1984年の東京で生活する主人公の青豆が、高速道路の非常階段を降りることで突如1Q84年というべつの世界——「よりプリミティブな世界」³⁹——へと入り込んでしまうことをその構造として持っているのであるが、それは、「麻原に命令され地下鉄サリンガスをまいて、死刑宣告を受けた」信者らが、「ヨガ教室に入ってヨガをやっているうちに、宗教的領域に入りこんでいった」と同じだということである。「よくわからないうちに別の世界に引き込まれたという意識が強いと思う」——村上は、そう彼らの思いを代弁している⁴⁰。

このように『1Q84』には、オウム裁判の傍聴経験による影響が色濃く認められるわけであるが、内容の面で目を惹くのは、たとえばつぎのようなシーンである。

「この世には絶対的な善もなければ、絶対的な悪もない」と男は言った。「善悪とは静止し固定されたものではなく、常に場所や立場を入れ替え続けるものだ。ひとつの善は次の瞬間には悪に転換するかもしれない。逆もある。〔中略〕重要なのは、動き回る善と悪との balan

スを維持しておくことだ。どちらかに傾き過ぎると、現実のモラルを維持することがむずかしくなる。そう、均衡そのものが善なのだ。〔以下略〕⁴¹

新興宗教団体「さきがけ」のリーダーが青豆に語る「絶対的な悪もない」というせりふは、「悪は根源的なものではない」という、前節で見たアーレントの言葉を想起させはしないだろうか。また、善と悪とが「場所や立場を入れ替え続けるもの」であることは、たとえば戦時下を思い浮かべればよいだろう。善と悪は、いまま倫理学の主題のひとつでありつづけている⁴²。

さて、さきの引用でいわば象徴的に描き出されていた「善と悪」についての考えを、村上はインタビューにおいて、つぎのように反復している。

善とか悪とかいうのは絶対的な観念ではなくて、あくまでも相対的な観念であって、場合によってはがらりと入れかわることもある。だから、何が善で何が悪かというよりは、いま我々に何かを「強制している」もの、それが善的なものか悪的なものかを、個々の人間が個々の場合で見定めていかざるを得ない。それは作業としてはすごく孤独で、きついことですよね。自分が何を強制されているのか、それをまず知らなくてはならないし。⁴³

つづけて村上は、「もう一つの問題は、システムは、それがどのようなシステムであれ、個々の人間が個々に決断を下すことを、ほとんどの場合認めないということです」⁴⁴と述べている。文脈からして、「我々に何かを「強制している」」当のものを、村上が「システム」と呼んでいるのではないかと考えることは許されるだろう。

5 「壁と卵」——あるいはシステムと一人ひとりの人間

アーレントがアイヒマン裁判の傍聴のため、聖地エルサレムに滞在した1961年からおよそ半世紀後の2009年2月に、村上春樹はエルサレム賞を受けるために同地を訪れている。「当時ガザの騒乱に対するイスラエル政府の姿勢に非難が集中しており」、村上が同賞を受けたことについては、「国内外で激しい批判」が起こりもした。「受賞を断った方が楽だった」という彼が、「でも遠くの土地で僕の本を読んでくれているイスラエルの読者のことを考えると、そこに行って、自分の言葉で、自分なりのメッセージを発する必要があるのではないか」と考え、受賞の言葉として読み上げられたのが、「壁と卵」と題するスピーチである。⁴⁵

そのなかで村上は、「私が小説を書くときに、常に頭の中に留めていること」として、以下の「個人的なメッセージ」を差し出している。——「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。」⁴⁶

さらに村上はこうつづける。「どれほど壁が正しく、卵が間違っていたとしても、それでもなお私は卵の側に立ちます」と。そして、「もし小説家がいかなる理由があれ、壁の側に立って作品を書いたとしたら、いったいその作家にどれほどの値打ちがあるでしょう？」とも。⁴⁷

ここで（硬い大きな）壁とは、「爆撃機や戦車やロケット弾や白燐弾や機関銃」の、対して卵は「それらに潰され、焼かれ、貫かれる非武装市民」のメタファーである⁴⁸。直接的には「ガザ地区における激しい戦闘」⁴⁹の様子が念頭に置かれているのであろうが、「そこにはより深い意味」もあると述べ、村上はこう聴衆に語りかける。

こう考えてみて下さい。我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだと。かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵なのだと。私もそうだし、あなた方もそうです。そして我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにとっての硬い大きな壁に直面しているのです。その壁は名前を持っています。それは「システム」と呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはずのものです。しかしあるときにはそれが独り立ちして我々を殺し、我々に人を殺させるのです。冷たく、効率よく、そしてシステマティックに。⁵⁰

そのうえで村上は、「我々の魂がシステムに搦め取られ、貶められることのないように、常にそこに光を当て、警鐘を鳴らす」ことこそが「物語の役目」だと説いているのだが⁵¹、ここで注意すべきなのは、村上が「壁」と「卵」とを単純に二項対立的に捉えているわけではない点である。なぜなら、「我々がシステムを作った」⁵²からである。「システムという強固な壁」⁵³は、「決して国家権力が作った外部的なものではなく」⁵⁴、私たち人間が作りだしたものなのだ。ちなみに「システム」という語は、「組織」^{システム}として彼の初の書き下ろし長篇小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)において登場していたが、この作品の前身にあたる「志のある失敗作」⁵⁵は、「街と、その不確かな壁」(1980年)と題されていたのであった。

6 無思考という悪

「わたしは長年、具体的にいうなら三〇年間、悪の本性について考えてきました」——第3節でも引いた「サミュエル・グラフトンの質問への回答」において、アーレントはこのように書いていたが、では村上春樹はどうなのだろう。『海辺のカフカ』(2002年)刊行の翌年に発表されたあるインタビューにおいて、彼はこう述べている。「悪ということについては、僕はずうっと考えていました。僕の小説が深みを持って広がりを持つていくためには、やはり、悪というものは不可欠だろうと、ちょっとしたきっかけのようなものがあって、ずうっと考えていたんです。どういう風に悪を描けばいいのかというようなことを考えているんです。そういう風にはっきり考え始めたのは、『世界の終り』を書いた後ですね。そこから悪というものが常に意識の中にあります」。⁵⁶

つまり、政治理論家と作家はともに「悪」について持続的に考えていたのであり、アーレントにとってのアイヒマン裁判、村上におけるオウム裁判とは、両者に「悪」の実相をまざまざと突きつけてくるものだったのだろう。だからこそ二人は、裁判の傍聴をみずから買って出ることを選んだのである。では、両者が裁判において現実的に見いだした「悪」とはどのようなものだったのか。

アーレントがアイヒマンに見いだしたのは「無思考」、つまりは「なにも考えていない」という悪だった。

私はこの犯罪者の行ないがあまりに浅薄であることにショックを受けた。ここでは彼の行為の争う余地のない悪を、より深いレベルの根源ないしは動機にさかのぼってたどることができないのだ。やったことはとんでもないことだが、犯人(今、法廷にいる、少なくともかつてはきわめて有能であった人物)は、まったくのありふれた俗物で、悪魔のようなところもなければ巨大な怪物のようでもなかった。彼には、しっかりしたイデオロギー的確信が

あるとか、特別の悪の動機があるという兆候はなかった。過去の行動および警察による予備尋問と本審の過程でのふるまいを通じて唯一推察できた際立った特質といえば、まったく消極的な性格のものだった。愚鈍だというのではなく、何も考えていないということなのである。⁵⁷

裁判において弁護側は、「アイヒマンは最終的解決の中の〈ちっぽけな歯車〉にすぎなかった」と主張したが、アーレントは「この歯車理論全体が法的には無意味であり、したがってアイヒマンという〈歯車〉にどれだけの重要性を与えるかなどということは全然どうでもよかった」と述べ、これを却下する⁵⁸。むしろ、彼女にしても「官僚—支配」や「匿名の者による支配」の問題性については十分承知している。『全体主義の起源』ですでに「官僚制——専制の遺産」という節を設けているぐらいである。とはいえ、彼女はアイヒマンにこう語りかけたのであった——「君が大量虐殺組織の従順な道具となったのは、ひとえに君の不運のためだったと仮定してみよう。その場合にもなお、君が大量虐殺の政策を実行し、それゆえ積極的に支持したという事実は変わらない。というのは、政治とは子供の遊び場ではないからだ。政治においては服従と支持は同じものなのだ」⁵⁹。

「思考の欠如」を「私たちの日常生活ではきわめてありふれたこと」としつつも、「アイヒマンが私たちほかの人間と違っていたのは、彼にはあきらかに、このように思考を働かせるということをもるで知らなかったということ」と遺著の冒頭でもくり返し述べるアーレント⁶⁰。アイヒマン裁判の傍聴後から彼女が急逝するまでの十数年は、まさに「思考していないことと悪とのこの奇妙な相互依存関係」⁶¹の問題の解明に充てられたと言っても決して過言ではないのである。

7 私たちの内側に潜む悪

それに対して、村上春樹はオウム裁判、とりわけ林泰男の裁判を傍聴しつづけることで、つぎのような感想を持たずにはいらなかったという。

彼〔林泰男〕には人間的な弱さがあり、それが引き金になり、やがては致命傷となった。ある意味、誠実な人柄ではあったが（彼を身近に知る多くの人々が、口を揃えてそのように証言していた）、ものごとをひとつに思い詰めるところがあり、その不安定さが結果的に、重大な認識の錯誤を呼ぶことになった。恐怖と不安の故に、あるいは真面目さと我慢強さの故に、自己矛盾から目をそらし、誤った行動に走ることになった。

しかしどのように考えても、彼の人格は決して犯罪者のそれではないし、その弱さは多くの普通の人々が持ちうる種類の弱さだった。誤解を恐れず極端に言うなら、林は間違ったときに間違った場所にいただけなのだ。そして彼は、自分の力ではその間違いをたどすことはできなかったし、間違った回路から抜け出すこともできなかった。いや、自分が間違った回路に入ってしまったことを、ある程度わかっているが、おそらくはその性格的な弱さ故に、自分なりに理由をつけて、認めようとしなかった。⁶²

林の弱さを「多くの普通の人々が持ちうる種類の弱さだった」と村上を書く。「林は間違ったときに間違った場所にいただけなのだ」と。彼のこの思いは、アーレントが「問題なのは

宗教や文学が説明しようとしてきた邪悪〔wickedness〕ではなく、ただの悪〔evil〕なのです」としたうえで、「邪悪ではないごくふつうの人のうちに、特別な動機がなくても、無限の悪をなす能力があることが重要なのです」⁶³と述べていたことと呼応するのではないか。つまり、アーレントであれば「根源的な悪」としての《全体主義》、村上であれば「絶対的な悪」としての（たとえば『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で描かれていた）「やみくろ」という「悪」についての理解から出発しつつも、裁判の傍聴経験をへて、二人はともに「悪」を「ごくふつうの人のうち」に、あるいは「自分の側」⁶⁴に見いだすことになったのである、と。というのも、決まり文句や常套句の頻用に顕著な無思考は、私たちのだれもがそれと無縁であるとは言い難いし、また「システムという強固な壁」は、私たち自身が作りだしたものであるからだ。そうであるならば、悪は私たちの外側にあるのではなく、むしろ内側に潜むものだということになるだろう。⁶⁵

いっぽう、「間違った回路」はのちに「クローズド・サーキット」という語で言い換えられ、その怖さはこう特徴づけられもする。

サーキットを閉鎖してしまっただけから出さずに、上が判断したとおりの方向に、ネズミみたいに走らせる。そこで人は方向感覚を奪われ、強制する力が善であるか悪であるかということすら判断できない状況に追い込まれます。

それがオープン・サーキットであれば、ある程度の個人的判断が可能なんです。でも一回閉鎖されてしまうと不可能になる。サリンを撒けと命じられたときノーと言えばよかったじゃないとか、サリンの袋を持って逃げればよかったじゃないとか言う人がいますが、クローズド・サーキットに一回入ってしまうと、そんなことまずできなくなってしまいます。でも法律的にはそれは純粋に犯罪として裁かれなくては行けないし、裁かれれば有罪になるし、有罪になれば量刑的に死刑判決は避けられない。そういう怖さを、僕は法廷でひしひしと感じた。⁶⁶

最後に村上が述べていることは、アーレントが歯車理論を「法的には無意味」としていたのと同趣旨であろう。そして、クローズド・サーキットは「思考の閉鎖性」とも言い換えられるのだが、これについては、本稿の冒頭ですで見たとおりである。村上は『1Q84』の女性主人公に対して、「青豆は、自分のまわりで世界を閉鎖させるまいという意味がきわめて強い女性です」、「彼女はその「[サーキットを]開けていく」という感覚を鮮やかに持ちつづけている人です」と述べ、また男性主人公の天吾についても「自分自身を開いていかなくはという思いが強くあります」と述べている⁶⁷。村上がその過程で言う、「自分の頭で考え、自分で判断を下すこと」⁶⁸という言葉は、晩年のアーレントの主題そのものと言ってもよいのではないか。

2018年にこの国では公文書の改ざんが明るみとなり、証人喚問の場においてある官僚は、「刑事訴追を受けるおそれがあるので、答弁を差し控えさせていただきたい」という定型文による答弁拒否を延べ55回にわたって行なった。あるいは、アメリカンフットボールの練習試合において、相手選手に危険なタックルを行なったある大学の選手は、会見の席で「たとえ監督やコーチに指示されたとしても、私自身がやらないという判断ができずに、指示に従って反則行為をしてしまったことが原因」と述べた⁶⁹。アーレントと村上春樹が向き合った「悪」はいまだ問題のままでありつづけている。

ゆえに、アーレントがルポの「追記」で述べていた以下の警句を、いまなお私たちは噛みしめなければならない。

——「〈上からの命令〉という事実は人間の良心の正常な働きをいちじるしく阻害するということを認めるほかはないというのが、真相なのである。」⁷⁰

付記：本稿は JSPS 科研費 JP17K02191、および平成30年度 学園研究費助成金(B)による研究成果の一部である。

- 1 村上春樹「アメリカで『象の消滅』が出版された頃」、『象の消滅 村上春樹短篇選集 1980-1991』新潮社、2005年所収、13頁。
- 2 辛島デイヴィッドは、村上春樹が Haruki Murakami として英語圏で知られてゆく経緯を、『羊をめぐる冒険』の英訳である *A Wild Sheep Chase* が刊行された1989年（の前史）から1998年までたどった文芸ドキュメント『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』（みすず書房、2018年）において、「村上の英語圏での飛躍には様々な要因があるが、作品の批評的成功に大きく貢献してきたのが『ザ・ニュー Yorker』誌である」（243頁）と述べている。村上が「New Yorker」の掲載作家となったいきさつについては、同書の117-126頁を参照。
- 3 村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000 ⑥ アンダーグラウンド』講談社、2003年、684-685頁。
- 4 「村上春樹ロングインタビュー」、季刊『考える人』No.33（2010年夏号）、新潮社、2010年、34-35頁。
- 5 本稿の表題の「ふたつのルポ」とは、アーレントの『エルサレムのアイヒマン』と村上春樹の『アンダーグラウンド』（およびその続編である『約束された場所で underground 2』）を指す。もっとも、前者が「悪の陳腐さについての報告」という副題が示すように文字通りのルポルタージュであるのに対して、後者は著書じしんが「ナラティブ・ノンフィクション」（前掲、『村上春樹全作品 1990～2000 ⑥』、692頁）と述べているように、通常の「ルポルタージュ」とはやや性格を異にするものとも言える。とはいえ、文芸評論家の清水良典が「取材によって事実を明らかにするルポルタージュとしての性格とはちょっと異なる側面を、このインタビュー集は持っている」としながらも、最後に「これは地下鉄サリン事件のルポルタージュである以上に、作家村上春樹のリハビリテーションのルポルタージュなのだ」と評していることから、広義のルポルタージュに含めてよいように思われる。清水良典『[増補版] 村上春樹はくせになる』朝日文庫、2015年、22頁、35頁。
- 6 仲正昌樹『今こそアーレントを読み直す』講談社現代新書、2009年、33頁。
- 7 同書、34頁。
- 8 ヤング＝ブルーエルによる『ハンナ・アーレント伝』の論述を借りれば、『エルサレムのアイヒマン』への批判は、以下のようにまとめられうる。「それは、アドルフ・アイヒマンを陳腐な男として描くアーレントの記述、『エルサレムのアイヒマン』を通して語られてはいるが、三百頁近くのうちのわずか十頁に集中していた「ヨーロッパ・ユダヤ人評議会」とナチの「最終的解決」における彼等の役割についての彼女の意見、それから、とくにこの本の最初と最後の章の、この裁判のやり方、この裁判が提起した法的諸問題、この裁判がもつ政治的目的についての彼女の議論であった。」（エリザベス・ヤング＝ブルーエル『ハンナ・アーレント伝』荒川幾男ほか訳、晶文社、1999年、450頁。）
- 9 加藤典洋「語り口の問題」、『敗戦後論』ちくま学芸文庫、2015年所収、281頁。なお、この論考の初出は『中央公論』1997年2月号である。
- 10 同書、277頁。
- 11 ゲルショーム・ショーレム＋ハンナ・アーレント「エルサレムのアイヒマン ゲルショーム・ショーレム／ハンナ・アーレント往復書簡」矢野久美子訳、『現代思想』vol.25-8（1997年7月号）、青土社、66頁。
- 12 加藤、前掲書、257頁。

三 浦 隆 宏

- 13 加藤はつぎのようにも述べている。「また、アイヒマンの味方なのか、という評まで生んだ、アイヒマンについて非常に深くコミットし、可能な限りむしろアイヒマンに沿って物事を理解しようと試みている記述も、少なくともわたしにはきわめて強い印象を与える」（同書、276頁）。ここでのアーレントのアイヒマンへの関わり方は、村上春樹の地下鉄サリン事件被害者、および加害者をも含むオウム真理教の元信者らへの関わり方にも相通ずるものだと言える。後註26を参照。
- 14 同書、273頁。
- 15 同書、245頁。
- 16 同書、255頁。
- 17 清水、前掲書、14頁。
- 18 同書、15頁。
- 19 同書、34-35頁。〔 〕内は引用者による補足。以下同様。
- 20 村上春樹『村上春樹全作品1990～2000 ⑥』、692頁。
- 21 同書、25頁。
- 22 同書、693頁。
- 23 加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』岩波新書、2015年、174頁。
- 24 村上春樹「東京の地下のブラック・マジック」、『村上春樹 雑文集』新潮文庫、2015年所収、247頁。
- 25 清水、前掲書、33頁。
- 26 加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』、170頁。なお、『アンダーグラウンド』で村上が採った「インタビュー」あるいは「聞き書き」とは、彼自身の言葉でいうとつぎようになる。「私は人々の語る話をそのままそっくり自分の中に受け入れよう、血肉として取り込もうとした。意識を集中してできるかぎり相手の立場になってものを考え、相手の視線でものを見て、相手の心でものを感じようとつとめた」。その結果、村上は「一人ひとりの人生に、また語られるひとつひとつの話に、あらがいがたく魅了され」、「人間というものは、人生というものは、じっと目を凝らして見ていくとそれぞれにこれほど奥の深いものなのかと、あらためて感心させられた。その深さに少なからぬ感動さえ覚えた」という。村上春樹『村上春樹全作品1990～2000 ⑥』、656-657頁。
- 27 ゲルショーム・ショーレム+ハンナ・アーレント「イエルサレムのアイヒマン ゲルショーム・ショーレム／ハンナ・アーレント往復書簡」、70頁。
- 28 E. ヤング＝ブルーエル『なぜアーレントが重要なのか』矢野久美子訳、みすず書房、2008年、1-2頁。
- 29 同書、1頁。仲正昌樹は「ニュースピーク」についてこう説明している。「全体主義的な空間では、言葉は、ものの見方を多元化するためではなく、均一化するための媒体になります。オーウェルの『一九八四年』に出てくる人工言語、ニュースピーク（Newspeak）はまさにそんな感じですね。余計なこと、つまり体制の世界観に合わないことは考えさせない言葉です」。仲正昌樹『悪と全体主義 ハンナ・アーレントから考える』NHK出版新書、2018年、207頁。
- 30 平野明彦「ヤスパースとアーレントー「イエルサレムのアイヒマン」をめぐる一」『国際関係学部研究年報』第35集、日本大学国際関係学部、2014年、3頁。
- 31 L. ケーラー／H. ザーナー編『アーレント＝ヤスパース往復書簡1926-1969 2』大島かおり訳、みすず書房、2004年、238頁。
- 32 L. ケーラー／H. ザーナー編『アーレント＝ヤスパース往復書簡1926-1969 1』大島かおり訳、みすず書房、2004年、71頁。
- 33 「サミュエル・グラフトンの質問への回答」、ハンナ・アーレント（J. コーン／R.H. フェルドマン編）『アイヒマン論争 ユダヤ論集2』齋藤純一・山田正行ほか訳、2013年所収、336-337頁。
- 34 ハンナ・アーレント／ジェローム・コーン編『責任と判断』中山元訳、ちくま学芸文庫、2016年、157頁。
- 35 ハンナ・アーレント『新版 エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、2017年、349頁。傍点は原文。なお、決まり文句＝常套句の脅威について、アーレントは1954年発表の「理解と政治（理解することのむずかしさ）」において、すでにつぎのように書いていた。「暴力は言

「悪」をめぐるふたつのルポ

論が終わるところで始まる。闘いのために用いられる言葉は^{スピーチ}言論の資格を失う。それは^{クリシェ}常套句となる。常套句が私たちの日々の言葉や議論に浸透するその度合いが、私たちがどれだけ言論の能力が奪われているか、そしてそればかりでなく、私たちの議論を終わらせるのに悪書（悪書にかぎってよい武器になる）よりももっと有効な暴力という手段に訴える用意がどれだけできているかを知る指標となる」（ハンナ・アーレント／J. コーン編『アーレント政治思想集成 2 理解と政治』齋藤純一ほか訳、みすず書房、2002年、123頁）。また、「常套句の氾濫、決まり文句の洪水」については、最近では哲学者の古田徹也が、カール・クラウスの言語論を参照しながら、警鐘を鳴らしている。古田徹也『言葉の魂の哲学』講談社選書メチエ、2018年。

- 36 「村上春樹ロングインタビュー」、39-40 頁。
- 37 同インタビュー、33 頁。
- 38 同前。
- 39 同インタビュー、51 頁。
- 40 同インタビュー、33 頁。
- 41 村上春樹『1Q84』（BOOK2）、新潮社、2009 年、244-255 頁。傍点は原文。このシーンを取り上げつつ、小山鉄郎は「村上春樹が描く世界は、みな善悪がオセロゲームのように瞬時に入れ替わってしまう世界だ」と書いている。小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』講談社現代新書、2010 年、162 頁。
- 42 たとえば、大庭健『善と悪——倫理学への招待』岩波新書、2006 年を参照。
- 43 「村上春樹ロングインタビュー」、34 頁。
- 44 同前。
- 45 村上春樹『村上春樹 雑文集』、94 頁。
- 46 同書、97 頁。太字は原文。
- 47 同書、98 頁。
- 48 同前。
- 49 同書、96 頁。
- 50 同書、98-99 頁。
- 51 同書、99 頁。
- 52 同書、100 頁。
- 53 同前。なお、村上はインタビューにおいてこう述べている。「父性というのはつねに大事なテーマでした。現実的な父親というより、一種のシステム、組織みたいなものに対する抗力を確立することは、大事な意味を持つことだった。エルサレム賞を受賞したときの「壁と卵」のスピーチにしても、システムの問題として語っているけれど、同時に父性原理みたいなものについて語っていたつもりです。自分を束縛しようとする力、それも論理的に束縛しようとする力という意味で。母性というのは、もう少し情念的な束縛だけど、父性というのは制度的な束縛であるわけです。それを振り払って自分が個であり自由であることを求めるのは、僕にとって普遍のテーマです。」（「村上春樹ロングインタビュー」、61 頁。）
- 54 柴田勝二「システムのなかの個人 村上春樹・カフカ・オーウェル」、柴田勝二・加藤雄二編『世界文学としての村上春樹』東京外国語大学出版会、2015 年所収、30 頁。柴田はこうつづけている。「この場合の「システム」とは政治、経済をはじめとする生活の基底的な構造全般を指しているが、人間を抑圧する力が国家権力のような収斂的な形ではなく、みずからの生活の物質的な基盤そのものにあるとする考え方は、現代的であると同時に、ここで見てきたように村上の作品世界に遍在する基本的な把握でもあった」（同頁）。
- 55 村上春樹「『自作を語る』はじめての書下ろし小説」、『村上春樹全作品 1979-1989 ④ 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』講談社、1990 年付録、VI 頁。
- 56 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2011』文春文庫、2012 年、118-119 頁。なお、2017 年刊行の『みみずくは黄昏に飛びたつ』というインタビュー集において、聴き手の作家・川上未映子は、「村上さんの小説は「悪」の変化、変質みたいなものを書いているというふうにも読めてくると思うんですね。そして『1Q84』において、リトル・ピープルが一つの飽和点、ピークみたいなものと

三 浦 隆 宏

- なって、『騎士団長殺し』では、さらに「悪」の形が変わったような気がするんです」と述べている。川上未映子訳／村上春樹語る『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社、2017年、84頁。
- 57 ハンナ・アーレント『精神の生活（上）第一部 思考』佐藤和夫訳、岩波書店、1994年、6頁。原文の傍線を傍点に変更。
- 58 アーレント『新版 エルサレムのアイヒマン』、397頁。
- 59 同書、384頁。
- 60 アーレント『精神の生活（上）第一部 思考』、7頁。訳語を一部変更。
- 61 アーレント『新版 エルサレムのアイヒマン』、396頁。
- 62 村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000 ⑥ アンダーグラウンド』、684頁
- 63 アーレント「思考と道德の問題——W.H. オーデンに捧げる」、前掲『責任と判断』所収、341頁。傍点は原文。
- 64 川上未映子訳／村上春樹語る『みみずくは黄昏に飛びたつ』、87頁。村上の「物語を深めるためには、自分の側の「悪」みたいなものには触れないわけにはいかないんです。そうすると、その戦いというのは単純なものではなくなってくる」との発言を受けて、川上は「「悪」と戦うということは、同時に自分の中にある「悪」みたいなものと向き合うことでもある、そういうことですね」と応えている。
- 65 たとえば村上はこう述べている。「『1Q84』を」物語的に言えば、「さきがけ」を分裂させ、そのリーダーを悪魔的、超越的な存在に変えていくのは、おそらくリトル・ピープルの作用です。そしてそのリトル・ピープルを地下の世界から導きだしたのは、あくまでも我々自身なのです。」（『村上春樹ロングインタビュー』、59頁。）
- 66 同インタビュー、34頁。
- 67 同インタビュー、35頁。官僚制をテーマとした著書『官僚制批判の論理と心理——デモクラシーの友と敵』（中公新書、2011年）をも持つ政治学者の野口雅弘は、マックス・ヴェーバーの「複数的で、抗争的な合理性論」とアーレントの無思考についての議論とを突き合わせた論考において、アイヒマンの悪を「一つの合理性に閉じこもり、いかなる懐疑や、別様でもありうるという可能性に目もくれない」という点に見いだし、「ある特定の合理性に「閉じ」こもり、複数性を否定していくという悪」の存在を浮き彫りにしたうえで、「いかに「閉じる」という意味における悪を注意深く避けるのかが、ますます重い課題になっている」と書いている。野口雅弘「合理性という悪」、太田義器・谷澤正嗣編『悪と正義の政治理論』ナカニシヤ出版、2007年所収、123頁、および127-128頁。
- 68 「村上春樹ロングインタビュー」、35頁。
- 69 権威への服従については、社会心理学者のスタンレー・ミルグラムが1960年代前半に米国で行なった研究、いわゆる「アイヒマン実験」がよく知られている。なお、2017年3月に学術誌 *Social Psychological and Personality Science* に掲載された「2015年でも電気ショックを与えられるか」という題名の研究では、90%の被験者たちが、権威の下で電気ショックのボタンを最後まで押し続けた、とのことである。ミルグラムが行なったこの服従実験の詳細については以下を参照。スタンレー・ミルグラム『服従の心理』山形浩生訳、河出文庫、2012年。
- 70 アーレント『新版 エルサレムのアイヒマン』、404頁。